

作家
元国際線乗務員
黒木安馬

【プロフィール】高校時に米国留学後、早稲田大学を経てJAL国際線客室乗務員として30年勤務。世界初の「カラオケ・フライト」や「1万メートル上空・北島三郎機上コンサート」などを実現させる。千葉の自宅は1300坪の山林を開墾してプール、テニスコート、コンサートホール等を手作りする。現在、㈱日本成功学会社長として自己啓発や社員教育で講演中。著書に『ファーストクラスの心配り』、『あなたの人格以上は売れない!』(プレジデント社)、『成「幸」学』(講談社)、『出過ぎる杭は打ちにくい!』(サンマーク出版)、『面白くなくちゃ人生じゃない!』(ロングセラーズ)、『小説・球磨川』(上下巻・ワニブックス)などがある。
E-mail:yasuma@myad.jp URL:http://www7b.biglobe.ne.jp/~sanpercent-club/

21世紀だ！ ―――― 人生・農業リセット再出発 213

本物に触れる……真贋の眼力を養う

尾張名古屋は城でもつ、と歌われたように徳川家康は金のシャチホコで有名な、日本最大級の立派な名古屋城を建築した。徳川御三家・尾張藩の初代藩主は家康９男の徳川義直、家康遺品の3,000冊が名古屋の徳川美術館に残っている。家康は８歳で今川家に人質に出されて寂しさを紛らわすのに膨大な読書量になり、それがそのまま残された。“世の物事がどうあるべきかを知るには本しかない、正しい筋道が分かれば世は治まり戦いが起きることはない”が家康の遺訓である。

館内に刀剣甲冑(かっちゅう)が並び、「国宝」織田信長の刀は、本能寺の変で明智光秀が奪い取ったものが、加賀の前田から将軍綱吉へ、尾張徳川の家宣に渡った代物だ。どの刀も刀工の銘を彫ってあるが、伝説の「正宗」には何も彫っていない。鎌倉時代の刀工・正宗は名を彫らなくても一目瞭然で判別できる銘刀だったのだ。正宗と彫ってあったという人がいたら、それは偽物を見たことになる。

刀から派生した言葉は多い。「身から出た錆」、たるんだ者に「焼きを入れる」、「太刀打ちできない」、腕前が落ちて「焼きが回る」、刀身の反りと鞘が合わない「反りが合わない」、「鞘当て」、「元の鞘に収まる」、鍔(つば)を固定させる金具の切羽が詰まると刀の抜き差しができないから「切羽詰まる」、「付け焼刃」など。

圧巻は本物の手紙類が目の前にあることだ。信長と武田信玄や明智光秀とのやり取り、家康への手紙、面白いのは信長から秀吉への手紙である。秀吉の女狂いに妻のネネが信長に苦情を述べると、信長は公印を押した手紙を秀吉に出す。手紙で、秀吉のことをなんと呼んでいるか？　誰でも「サル」と連想するが、これは江戸元禄時代の講談で面白く語られた嘘で、信長の手紙では、「おい、このハゲネズミ！　ええ加減にせい」と書いてある。後世の信長のイメージは冷酷な人物として描かれているが、史料をみると意外な事実が。光秀に裏切られた本能寺の変では、女性たち全員を逃がした後に自害したことを当事者の女性が証言している。部下の秀吉の妻に対しても丁重な直筆の手紙を送っている。「久し振りに訪ねて来たそなたの美しさには驚き入りました」と優しい誉め言葉。ネネも秀吉もコロッと参って主君の信長に心酔するのは必定だ。ポルトガル宣教師フロイスがこの時代に面会した人物評の本国への報告文書がある。「秀吉は優秀な武将だが気品に欠け、身長が低く、醜悪な容貌の持ち主。極度に淫蕩で悪徳に汚れて獣欲に耽溺している抜け目なき策略家。目がとび出ており、シナ人のようにヒゲが少なく、男児にも女児にも恵まれず……」。この原文を秀吉が知ったら激怒したに違いない！

「光秀は裏切りや密会を好み、残酷で独裁的でもあったが、己を偽装するのに抜け目なく、戦争においては計略・謀略を得意とし、忍耐力に富み」、「信長は、長身やせ型で髭は少なく声は甲高く常に武技を好み粗野で、正義や慈悲の行ないを好み傲慢で名誉を尊ぶ。決断力に富み戦術に巧みであるが、規律を守らず部下の進言に従うことは無い。人々からは異常な畏敬を受けている。自分をへりくだることは無く、自分以外の大名を軽蔑して自分の部下のごとく語る。理解力と明晰な判断力に優れ、神仏など偶像を軽視して占いは一切信じず、死後の世界など無いと明言する。事業は完全を極め、人と語るときには遠回しな言い方を嫌う」

成田空港税関の職員に講演した時に聞いてみた。「休日に出かけるところはどこか？」。デパートである。目的は買物ではなく見学のみ。エルメス、グッチなどのコーナーで、本物に触れるためなのだ。偽物を見分けるには、いかに本物を観てきたかの眼力が必須となる。人間力も、成功するには成功者たちにまみえることで磨かれる。